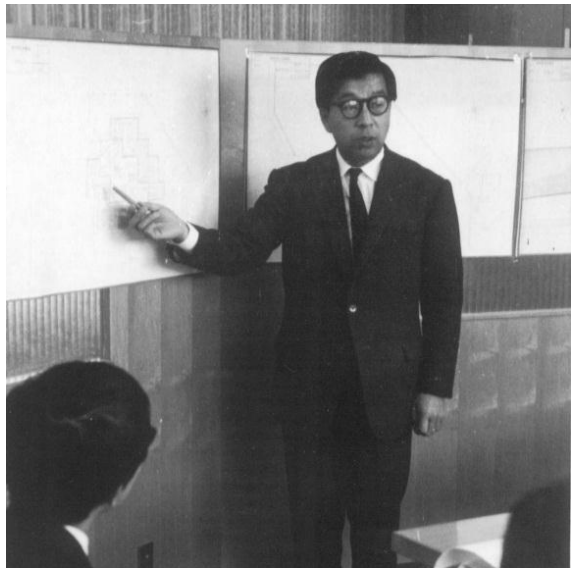
菊竹 清訓（1928-2011）
Kiyonori Kikutake

福岡県久留米市出身 ／ 建築家、工学博士
1950　早稲田大学理工学部建築学科卒
1953　菊竹清訓建築設計事務所開設



県立図書館の建築計画を説明する菊竹氏（当時38歳）

主な作品
1958　スカイハウス（自邸）
1958　島根県立博物館（現島根県庁第三分庁舎）
1963　出雲大社庁の舎（第15回日本建築学会賞受賞）
1964　ホテル東光園
1968　島根県立図書館（旧館）（2014年JIA25年賞受賞）
1970　島根県立武道館
1975　アクアポリス（沖縄海洋博）
1979　田部美術館
1992　東京都江戸東京博物館
1999　島根県立美術館（公共建築賞特別賞受賞）

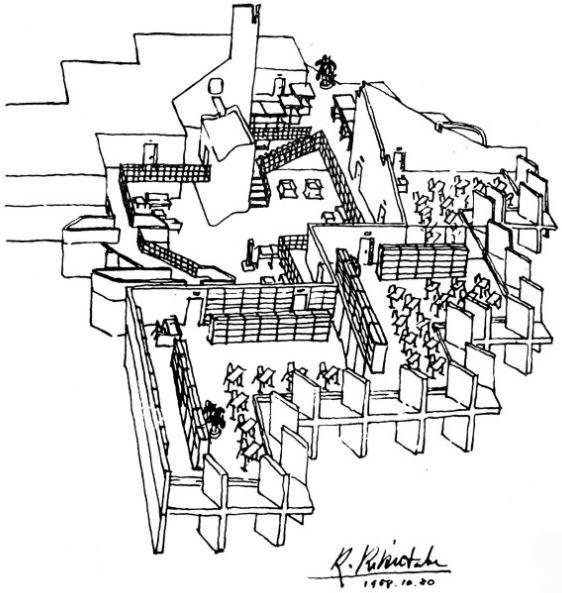
主な著書
1958 『代謝建築論』（彰国社）
1958 『建築のこころ』（井上書院）

島根県立図書館（旧館）　建築概要
設計　／ 菊竹清訓建築設計事務所
施工　／ 株式会社 竹中工務店 広島支店
構造　／ 地上２階建て　鉄筋コンクリート造 一部 鉄骨造
延面積 ／ 3,682 ㎡

ロビーのスツール（デザイン:菊竹清訓建築設計事務所）

島根県立図書館
〒690-0873　島根県松江市内中原町５２番地
TEL　0852（22）5725
http://www.lib-shimane.jp

写真・図版提供 ／ ㈱菊竹清訓建築設計事務所（表紙スケッチ及び☆印）
建築ガイド制作　／ 大建築友の会（事務局：島根県総務部営繕課内）
http://aba-shimane.or.jp/daikenchiku/



島根県立図書館 建築ガイド

Shimane Prefectural Library Architectural Guide

島根県立図書館の建築について

島根県立図書館の誕生

昭和41年、県庁西側の通称「お花畑（旧松江藩 薬草園跡地）」にあった旧松江刑務所が地元の強い要望で松江市郊外へ移転したことから跡地を県が取得し、昭和43年、現在の県立図書館が誕生しました。

建物の設計者は菊竹清訓。天才的なひらめきとカミソリのような造形感覚を持つ、日本を代表する建築家の一人でした。建設から46年が経過した今もなお、菊竹氏の作品を一目見ようと、国内のみならず海外からも多くの方が当館へ見学にいらっしゃいます。

図書館の中心的空間 – ロビーシステム

県立図書館の建築的な特徴の一つは、建物の中央に架けられた複雑なかたちの大屋根です。（下右写真）その下は吹き抜けのロビーとなっており、閲覧室や事務室など、主な部屋のほとんどはロビーを介してアクセスするよう計画されています。

菊竹氏はこのロビーを中心とした空間構成を「ロビーシステム」と名付けています。（上写真）

現代の「書院」– 雁行する構造フレーム

外観のもう一つの特徴は、打ち放しコンクリートの構造フレームがジグザグに連続する外観です。（下左写真）
これは菊竹氏が考案したＬ字型の「閲覧室モジュール」（後述の「図書館の「かた」」参照）を堀川に沿って並べることによって生まれたデザインで、打ち放しコンクリートながら雁行した壁面がどことなく桂離宮の書院のような伝統建築を想わせ、松江城周辺の歴史的環境と絶妙な調和を保っています。

城山の眺望への配慮

窓の外に設けられた壁は建物を支える構造体ですが、ガラス面に対して45度の角度が付けられています。これは構造体が閲覧室から城山への眺望を邪魔しないための配慮です。このような細かい心遣いによって風景は一枚の美しい絵画のように切り取られ、読書や勉強で疲れた目を癒やしてくれます。（上右写真）

菊竹事務所の会心作 – メイン階段

１階から２階中央カウンターへ上がる階段は、菊竹事務所の元副所長・遠藤勝勧氏が「菊竹事務所でデザインした階段の中でも、特に気に入っている」と語るほどの名品です。（上左写真）

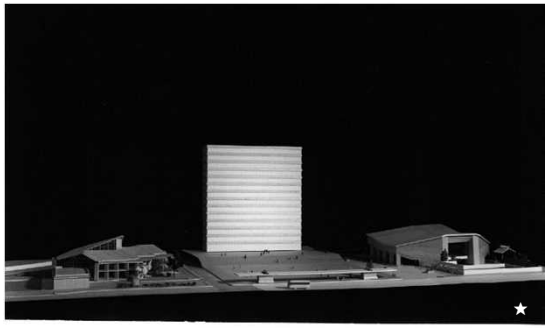
力学的合理性を追求し、ムダを徹底的にそぎ落とした段床は鉄筋コンクリートらしからぬ薄く軽やかな印象です。階段裏の抽象彫刻のような造形も必見です。

陽の目を見なかった温水式床暖房

当時、図書館と武道館の間の駐車場に県庁別館を建設する構想がありました。菊竹氏は、これを図書館・武道館とセットで計画しています。（下左写真）別館の地下には地域冷暖房の熱源プラントを設け、周辺の建物に空調用の冷温水を供給する計画となっていました。

当館のロビーにはプラントからの温水供給を前提とした床暖房配管が埋設されていますが（下右写真）、残念ながら県庁別館も地域冷暖房も実現せず、陽の目を見ることはありませんでした。

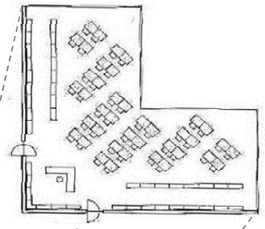
もし実現していれば日本で最初期の温水式床暖房となっており、このようなエピソードからも当館がいかに先進的な思想で設計されていたかお分かりいただけるのではないかと思います。



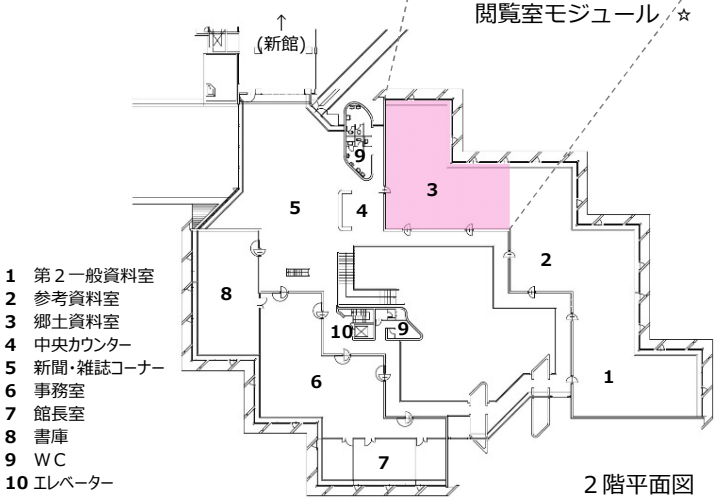
図書館の“かた”（型）

菊竹氏は高度情報化社会において特に重要となる図書館機能は「リファレンスサービス（調べ物のお手伝い）」であることを今から45年以上も前に見抜き、Ｌ字型スペースの“要”の部分に司書を配置して来館者の読書・調査のサポートを行う閲覧室の基本型（モジュール）を考案しました。

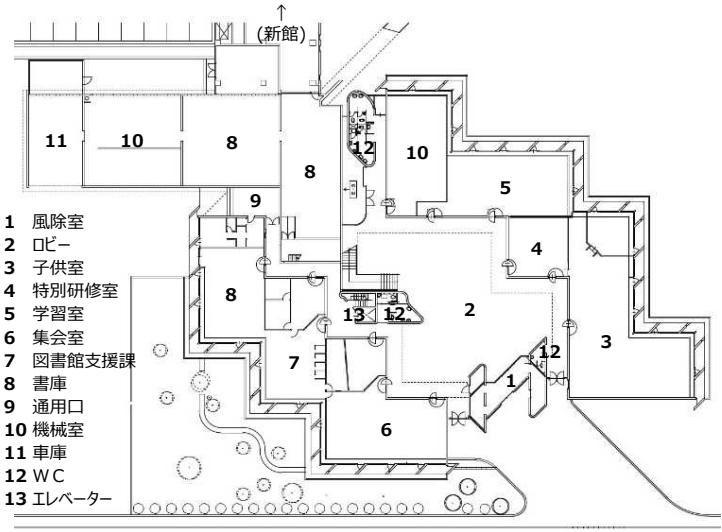
このモジュールを連続的に並べることで様々な敷地形状に適応でき、また将来の増築にも対応しやすいことから、菊竹氏はこれを一定の普遍性を備えた「図書館の“かた”」と名付けました。



閲覧室モジュール



２階平面図



1階平面図